
異説 とある魔術の禁書目録 弐

シェン・マクダウェル・タオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異説 とある魔術の禁書目録 弐

【Nコード】

N0806X

【作者名】

シエン・マクダウェル・タオ

【あらすじ】

器物損壊事件の犯人を見つける為に「」犯人は現場に戻ると言う言葉を信じて現場である第10学区の廃墟「ストレンジ」にやって来た夜尋と緒屠羽だったがそこでスキルアウトの襲撃にあい・・・？

昔のお言葉に「犯人は現場に戻る」という言葉がある。

「だから、現場にいつてみましょう」

彼の後輩がそんなことを言って歩きだしてからかれこれ一時間ほどで現場に到着した

場所は第10学区のストレンジと呼ばれるスラムのような地域。

様々な廃棄物や崩れたビルが所狭しと並び、スキルアウトの根城にもなっている場所だ。

「いやー、實際来てみると第10学区の酷さがわかりますね周りどこ見ても瓦礫と廃ビルしかないですし」

「まあここに住んでる人たちもいるわけだし、あんまりそうゆうことと言つのは良くないぞ」

デコピンで失礼発言をした緒堵羽に制裁を加える夜尋。

あう、と悲鳴をあげながら一步後退する緒堵羽は抗議しようと思をあげかけたが、やめた。

それは、夜尋のデコピンが以前よりかなり威力がなかったためである。

いつもの彼ならデコピンする際に勢いをつけて思いっきり吹き飛ばすのに今回はそれがなかった。

彼が制裁に力を入れない時は、何かを思い出している時だと、緒堵羽は長年の付き合いから理解していた。

暫く、周辺を偵察しようとした矢先、何かが足元に飛来した。

ヒュンツと風を切り裂く音と地面に何かが刺さる音は同時だった。

瞬時に思考を切り替え、夜尋は緒堵羽の手を引き瓦礫の影に飛び込む。

同時に数秒前まで自身の足があった所にもう一発何かが飛来する。緒堵羽が目を閉じ、自身の能力でそれを引き寄せる。

「これは、ボウガンの矢ですね」

「なら、狙撃手はそこまで離れていないな、恐らくどこかの二階辺りに潜んでいるだろう」

周囲を確認する夜尋。

二階が残っているビルは近くに一棟しかなかった。

しかし、いつの間に出てきたのか辺りは数人のスキルアウト達に包囲されていた。

「叶谷」

夜尋が短く後輩の名前を呼び目線で会話を行う。任せたと。

緒堵羽がそれに頷くのを確認すると夜尋は後方 狙撃手のいる廃ビル へ駆けていく。

それを阻もうと二人のスキルアウトがそれぞれの武器 鉄の棒、トンファー を持って彼に襲いかかるが、何を思ったかお互いの武器でお互いを攻撃しあって気絶した。

突然の事に目を白黒させる他のスキルアウト達。

夜尋の動きが素早すぎてお互いが攻撃を外しあった訳ではなく、緒堵羽が仕掛けた攻撃で彼らはお互いを攻撃しあった。

遠くの物体を操作する能力、念動力。

学園都市内で最もピュラーな能力ではあるが、使い方次第で凶悪な能力となる。

最初に接触してきた女子に足を引っ掛け転ばせ、続いて来た二人を念動力で互いを抱き寄せる形で固定し転がさせる。

他の三人を六つの手錠を飛ばし、手足を拘束して無力化した。

残った三人は圧倒的な力の差を見せつけられ、逃げ出そうとしたがそれを許すほど緒堵羽は優しくなかった。

手錠を足に飛ばして両足を拘束しそれにつけてあった拘束用のロープで三人を更に縛り上げた。

他の気絶しているスキルアウトを手錠で繋ぐと、緒堵羽は急いで彼の後を追った。

瓦礫の山から成る廃墟を夜尋は駆ける。

先程から何度かボウガンによる狙撃を受けたが瓦礫の影に隠れながら辛くも難を逃れていた。

肩で息をしながらも目的地のビル前までたどり着いた夜尋だったが。

「ここもかよっ」

予期していなかった訳ではないが、スキルアウトの面々が姿を表す。緒堵羽の所より数は少ないが、銃を持っている奴がちらほら見受けられた。

すぐさま、発砲されるがそれは夜尋に届かなかった。

壁によって銃弾は遮られていた。

一瞬、何故こんな壁がと考えようとしたがすぐに壁の向こうに回って銃弾を浴びせようする。

彼らが走る速度も決して遅くはなかったが、夜尋が反撃する準備を整えるには十分だった。

夜尋を撃ち殺さんと回り込んだスキルアウト達の足元が持ち上がる。それに動じたが最後。

それぞれの鳩尾に拳と蹴りを叩き込む夜尋。

他の武器をもったメンバーも一武器を別のものへと作り替えて使えなくした。(・・・・・・・・・・・・・・・・)

分子、と言うものがある。

二つ以上の原子が電荷的に中性的な物質で、同種あるいは異なる原子が科学結合により結び付いて分子となる。

この世に存在する全ての物質は原子が集まったいわば分子の集合体。夜尋の能力は、自身が触れた物の分子が形成している情報を掌握し自身が想像した物に分子の情報を固定し書き換える力、創作直し。クリエイティブコレクト

能力の強度は一大能力者(levell4)

超能力者(levell5)ではないのは直接触れないと効果を発揮できない為と夜尋の精神的問題があるための事だ。

急ぎ、階段を上がって二階までたどり着く。

狙撃手は夜尋に気がつくがボウガンに矢を装填している間に距離を詰め、得物を蹴り飛ばす。

ガツと腕を武器ごと蹴り飛ばされ、踞るスキルアウトの一員。

どうやら女性のようなだ。

そこへ、かけ上がってくる音が聞こえ、振り向き身構える夜尋だが、すぐに警戒を解いたのは上ってきた相手が風紀委員の後輩だったからだ。

「センパイ、ご無事、ですよね」

「ああ、なんとかな。さてっと」

夜尋は先程の狙撃手の前まで歩いて行き、目の前に座り込んだ。

「さて、話を聞かせて貰おうか」

「てめえらに話すことなんざ最初からねえっす^{ハナ}」

女スキルアウトはこちらの用件など知ったことではないとそっぽを

向いてしまった。

「まあまあ、質問聞いてみてからでも遅くないんでない？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・言ってみるっす」

かなりの間に少しだけ戸惑った夜尋と緒堵羽だったが聞いてくれる
という意味を確認して質問を投げ掛けることにした。

「最近、この付近に出没してるロボットやら壁やら人の体やらを何
らかの能力で焼き切る人を探してるんです、知りま、きやつ!？」

せんかと続けようとした緒堵羽の言葉を途中で遮って、立ち上がる
狙撃手。

その顔からは血の気が失せ、青ざめていた。

「あんたら、あの怪物何とかしてくれるっすか!？」

と、彼女はそれまでだるそうにしていた態度から一変し血相を変え
て掴みかかる勢いで聞いてくる。

（実際に夜尋が掴みかかっているのだが）

「・・・・落ち着けて。先ずはあんたの名前から教えてくれないか
？」

女性は赤井あかい 要非ようひと言い、スキルアウト所属は天龍スカイドラゴンだと言った。

要非の話によれば、スキルアウト狩り（仮名）は三年ほど前から出
没し始めたらしい。

そいつはその時に起こった事件の関係者を片っ端から探しだし、制

裁を加えているのだとか。

容姿やどこの学校かは彼女も他のメンバーも知らないと言ったことで、その日はお互いの連絡先を交換してお開きとなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0806x/>

異説 とある魔術の禁書目録 弐

2011年10月9日15時54分発行